

海を渡ったエースの闘病記

ぼくと野球と 糖尿病



新浦壽夫

niura hisao

海を渡ったエースの闘病記

ぼくと野球と 糖尿病

新浦壽夫

niura hisao

文藝春秋

ぼくと野球と糖尿病

海を渡ったエースの闘病記

1994年10月20日 第1刷

著 者 新浦壽夫

発 行 者 堤 堯

発 行 所 株式会社文藝春秋

〒102 東京都千代田区紀尾井町 3-23

電話 03-3265-1211 (代)

印 刷 所 精興社

製 本 所 加藤製本

* 定価はカバーに表示してあります。

* 落丁乱丁の場合は送料当方負担でお取替えいたします。小社営業部宛お送り下さい。

© Hisao Niura 1994

Printed in Japan

ISBN 4-16-349390-5

ほくと野球と糖尿病 * 目次

第一章 一九九四年五月、糖尿病学会

9

告白の日 11

体験発表 18

第二章 「背番号28」の野球人生 29

気がつけば巨人入団 31

怪我とのつきあいの始まり 39

長嶋監督とピッチャー新浦！ 52

結婚からエースへ 59

新旧交代のうねり 69

第三章 運命の三年間 81

巨人から韓国野球へ 83

「ケンチャナヨ」と入団発表 88

様々なプレッシャー 98

ストレスハゲ 114

二十五勝六敗の分岐点 122

金浦空港の別れ 132

第四章 ユニフォームを着た闘病生活 147

緊急入院 149

隠れて射ったインスリン 164

野球と食事療法のはざままで 172

日本球界復帰の誘い 180

第五章 苦難のカムバック 187

合併症の恐怖 189

「投げられません」 201

ユニフォームを脱ぐ 214

第六章 『今こそ体験を生かして』 223

現在の闘病生活 225

ストレスと糖尿病 233

妻からの手紙 238

野球評論家として 245

息子への手紙 250

あとがきに代えて 255

装画 牛窪良太
装帧 平林育子

ぼくと野球と糖尿病

海を渡ったエースの闘病記

第一章 一九九四年五月、糖尿病学会

告白の日

「十九時三十分発JAS908便は、一応離陸しますが、天候次第によっては引き返す可能性があります……」

大阪空港のカウンターで、係の女性にそういわれた。

一九九四年五月十一日水曜日。

小倉球場で開かれた前日の「ダイエー対日本ハム戦」の解説の仕事が終わって、博多駅から新幹線で大阪に着いた。今夜のうちに大阪空港から徳島に飛ぶ予定になっていた。

糖尿病を公表する——いよいよ、明日がその日だ。しかし、土壇場に来て、私の心はまだ揺れ動いていた。

明日五月十二日に徳島厚生年金会館で開催される「第三十七回日本糖尿病学会総会」で、いままで隠していた自分の病気を告白する。そのお膳立てをしてくれたのが慈恵医大の池

田先生と柴先生だった。今夜、柴先生と徳島市内のホテルで落ち合い、打ち合わせをすることになっていた。柴先生はすでに徳島に入っているはずだ。

どうすればいいんだと思った。聴衆の多くが医者さん、というその総会で何を話せばいいのか。先生との最終打ち合わせがまだ終わっていないかった。

（もしかしたら、飛行機のせいにして、このまま行かずにすむかもしれない）
勝手なことを考えながら、自宅の家に電話を入れた。

「取材申し込みの電話も入っているし、もう逃げられないわよ。とにかくその便に乗って、もし飛行機が引き返したら大阪に泊まって明日の朝一番の便で徳島に行ってくださいね」
「だけど、俺、何を話すのか、まだ決めていないよ。柴先生が作ったという俺の症状の資料も読んでいないんだから……」

「大阪のホテルに泊まることになったら、資料は柴先生からファックスして頂くわ。覚悟を決めて飛行機に乗ってください」

冗談めかしていったが、妻は落ち着いていた。やはり、どうあっても自分の病気を告白しなければすまなくなっているらしい。

仕方なく搭乗したが、案の定、飛行機は徳島上空から引き返し、その夜は大阪空港近くのホテルに泊まった。

ホテルには、徳島の柴先生からファックスが届いていた。資料を読みながら、眠れないままにさまざまなことを考えていた――。

今まで病気を明らかにすることができなかった理由を端的に言い切ってしまうえば、現役当時、自分がインスリンを射っている糖尿病患者であることが知れたら契約してくれるプロ野球の球団はなくなるだろうと思ったからだ。

巨人軍から韓国・三星ライオンズに移籍したときは「もう日本で野球をすることはないだろう」と思って海を渡った。

韓国野球の二年目、一九八五年のシーズンに二十五勝六敗の成績をあげた。この二十五勝が私の自信を蘇らせた。

「もう一度、日本で投げられるかもしれない……」

そして三年目、糖尿病が発病した。糖尿病の発病初期には自覚症状が全くないので、病気であることを意識しないでいられる。

三星ライオンズとの契約があと半年残っていた。私は迷うことなく、糖尿病を隠すことを決心した。

日本プロ野球に復帰した二年目の一九八八年、私の古巣である巨人に大リーグから移籍した糖尿病患者の投手がいた。ウィリアム・リー・ガリクソンである。各地で糖尿病患者

を励ます講演をしているとも聞いていた。

「ガリクソンはインスリンを六十単位も射っているようだ。君はその量も少ないし、もう何年も前に発病していながら、自分で血糖値を計り、自己コントロールできているじゃないか。その体験談をぜひ語るべきだよ」

柴先生がそう勧めてくれたのは大洋の二年目、一九八八年頃だ。前年にはカムバック賞も受賞し、糖尿病のコントロールもうまくいっていた。

しかし、私は踏み切れなかった。

来日して巨人で二年間働き、インスリンで血糖値をコントロールしながら二十一勝十四敗の成績を残したガリクソンは、帰国後大リーグに復帰し、その年ア・リーグの最多勝投手となっている。ガリクソンはアメリカのピッチャーだ。アメリカのプロスポーツは明朗でじめじめしたところが少ない。病気や体のハンディキャップを持つ選手たちが、それを克服して頑張っていることが、当然のことのように公表される。

韓国にいるとき、衛星テレビでアメリカのこんなコマーシャルを観た。糖尿病のフットボール選手が「私は血糖値を自分で測り、健康管理をしながらゲームに出ています」とコメントしていた。インスリンを扱っている製薬会社のコマーシャルだった。

驚き、感心すると同時に、日本では無理だろうな……と思った。